

家庭の教育力、地域の教育力を高めるための調査研究
(報 告)

平成 2 4 年 (2012 年) 3 月 2 9 日

彦根市社会教育委員の会議

目 次

は じ め に	・ ・ ・ 1
児童・生徒、教職員、自治会長等を対象とした アンケートの実施とその結果	・ ・ ・ 1
参考事例	
1 豊かで温かい人間関係づくりにつながる あいさつ運動の取組	・ ・ ・ 5
2 共感の力、思いやりの力を家庭・地域に根付かせ る取組事例	・ ・ ・ 7
3 豊かな自然体験、社会体験、生活体験の場を作る 取組事例	・ ・ ・ 10
お わ り に	・ ・ ・ 13

はじめに

私たちは、平成22年3月に「子どもを取り巻くさまざまな問題に対して、社会教育はどのように対応し推進していくべきか」の提言を行なった。その中で、「子育てに関すること」や「地域の教育力の育成に関すること」についても提言したところである。

今回は、家庭の教育力や地域の教育力にかかわる提言をさらに補完するために、次の三つの事柄を選び、状況の簡易な実態調査を行なうとともに、それらに即した実際の参考事例を探し求め紹介することとした。

地域におけるあいさつ運動

子どもや大人の「共感の力、思いやりの心」

子どもたちの自然体験・社会体験・生活体験の場

なお、全国的には次のように大規模の調査がいくつも行なわれており、実態の概要は地域によってもほとんど変わることはなく、今後とも参考にしていくべきものと考えたい。

* 彦根市子ども未来室「子育て支援に関するニーズ調査」

* 北海道2004年調査

* B e n e s s e 教育研究開発センター調査

* 徳島県意識調査「家庭や地域の教育力を高める方策について」の調査

児童、生徒、教職員、自治会長等を対象としたアンケートの実施とその結果

1. 児童・生徒たち対象

「地域や家での暮らし方」についてのアンケート (彦根市立 学校) (年) (男・女)					
1. 土曜日・日曜日をどのように過ごしましたか。家の中のことでなく、外出した場合だけ、次の ア～ケから選んで、日付の下に記入してください。いくつ選んでもかまいません。 ケ その他 については、その内容を「その他」の欄に書いてください。					
ア.部活動、イ.スポーツ少年団、ウ.学習塾、エ.スポーツ塾、オ.ならいごと、カ.友人と外遊び、キ.家族でお出かけ、ク.町内や学区内の行事、ケ.その他					
7月2日(土)	7月3日(日)	7月9日(土)	7月10日(日)	7月16日(土)	7月17日(日)
その他					
2. あなたの町内や学区では、あなたも参加できる「子ども行事」がおこなわれていますか。それらの行事に参加していますか A.よく参加している、 B.少し参加している、 C.ほとんど参加していない					
3. 「子ども行事」について、みなさんに尋ねます。 A.もっと行事があったらいいのと思っている、 B.少しでもべつにかまわない、 C.今のままでよい					
4. 町内や学区の行事に対して、お家の人はどう言われますか。 A.参加するようにすすめることが多い、 B.自分できめることだから、あまりやかましく言わない、 C.どちらかという、「やめておきなさい」と、言うことが多い					

小学生アンケート集計

小学校	人数	1.土日の過ごし方									2.「子ども行事」への参加			3.「子ども行事」について			4.町内学区行事への反応		
		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	A	B	C	A	B	C	A	B	C
男	138	22	248	15	81	47	132	193	41	138	74	46	13	39	39	56	50	77	7
女	132	3	102	16	30	106	149	279	49	145	69	49	13	48	37	47	59	69	4

中学生アンケート集計

中学校	人数	1.土日の過ごし方									2.「子ども行事」への参加			3.「子ども行事」について			4.町内学区行事への反応		
		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	A	B	C	A	B	C	A	B	C
男	147	523	0	35	35	12	163	53	12	76	30	59	54	31	56	56	46	89	8
女	125	399	0	26	14	13	105	109	12	53	16	43	61	22	43	53	26	87	3

<アンケート結果から分かること>

サンプル調査として本市における児童生徒の休日の過ごし方および家人の対応などについて、一定の傾向をみる事ができたといえる。全体を通して見て、小中学校ともに回答に著しい学校差はみられず、質問によって小学生と中学生、また男女の性別による差異が認められた。アンケートの各質問において、選択肢の出現頻度を集計することにより見えてきたこと

1. 質問1（土・日曜日の過ごし方）より

- ・小学生の土日の過ごし方は、特に男子では“スポーツ少年団”の活動が、女子では“家族でお出かけ”が、大きなウエイトを占めている。
- ・中学生の土日の過ごし方では、男女ともに“部活動”への従事が大きなウエイトを占めている。

2. 質問2（町内や学区での「子ども行事」への参加）より

- ・あきらかに、小学校と中学校では差異が認められる。

3. 質問3（「子ども行事」に対する子どもたちの思い）より

- ・「子ども行事」に対する児童や生徒の思いについてはバラツキがあり、一概に傾向をみてとることはできない。

4. 質問4（町内や学区での行事に対する家人の反応）より

- ・「町内や学区の行事」に対する家人の反応は、一様に“参加をすすめる”と回答するものが最も多く、家人が町内学区行事への参加を抑制すると答えたものは極めて僅かであった。

アンケートの質問1と質問2をクロス集計することにより見えてきたこと：

- ・小学校における児童の「子ども行事」への参加は、男子では土日に“スポ少年団”で多くの時間を過ごしている子どもほど積極的である。土日を“家族でお出かけ”や“友人との外遊び”で多くの時間を過ごす子どもほど、「子ども行事」への参加は消極的である。
- ・全体的に中学校では「子ども行事」への参加は消極的ではあるが、参加に積極的な生徒に関しては小学校と似たような傾向がみられる。

2. 学校の先生対象

学校名	勤務年数等 (印)
<p>1. 今日のさまざまな時代状況の中で、人の気持ちを想像する力や思いやり・察し等の「共感の力」を欠く状況が増えてきていると言われます。このことについて、先生はどう感じておられるでしょうか。教えてください。A,B,Cいずれかに をつけてください。</p> <p>A 自分もそう感じている。 B それほど心配していない。 C まったく気にしていない。</p> <p>2. 「共感の力」等は、地域・家庭・学校等の全てにおいて培われていくものと考えられます。家庭教育に目を向けた時、「共感の力」や「思いやりの心」を育てるには、家庭や保護者はどのようなことに心がけていけばよいとお考えでしょうか。先生のご意見を聞かせてください。</p> <p>3. 合わせて、それぞれの地域で行なわれている「あいさつ運動」についてお尋ねします。今の子ども達は、あいさつが十分できているとお考えでしょうか。A,Bいずれかに をつけてください。</p> <p>A 十分にできている。問題はない。 B まだまだ課題が多い。</p>	

< アンケート結果から分かること >

1. 「共感の力」を欠く状況が増えてきていることについて
勤務年数に拘わらず、子どもたちの「思いやりの力」の欠ける状況が増えていると感じている教員が多い。その中でも、特に勤務年数が20年以上の教員については、8割を超えている。
2. 「共感の力」「思いやりの心」を家庭で育てるには
日頃から家族・地域の人など、幅広くコミュニケーションを深めることが大切である。本を読んだり、見たり聞いたり、また自然との関わりを大切にしたり、いろいろな感動体験を通して「共感の力」「思いやりの心」を育てていく。
子どもは親の背中・後姿を見て育っていく。「共感の力」や「思いやりの心」を育てるには、親が地域との連携を大切にしたり、地域貢献への行動を実践するなど、言葉だけでなく、親自身が優しい心を行動に移していくことが大事である。
3. あいさつ運動について
勤務年数に拘わらず、9割を超える教員がそれぞれの地域で行われている「あいさつ運動」については、「まだまだ課題が多い」と考えている。

3. 市内自治会長さん対象

あなたの学区()

1. あなたの自治会(町内会)では、「あいさつ運動」(大げさなことでなくとも一寸した取組も含める)として何かの取組をされているでしょうか。(A, Bに印)
A 取組みをしている
B 特別に取り上げてはやっていない
2. 取組をしていると答えてくださった方は、どのような取組をされているのか具体的に教えてください。
3. あいさつ運動のことについて、日頃あなたが思ったり、考えたりされていることがありましたら教えてください。

<アンケート結果から分かること>

1. あいさつ運動の取組について
取組んでいると答えた人は79人の中で20人であり、約25%に相当する。
2. 取組の内容について
曜日を決めての通学安全指導に合わせて声かけ運動をしている。
特定の団体だけがおこなうのではなくて、学区の全体が声かけ運動をしている所もある。
3. あいさつ運動について思っていること
大人も子どもも出来ていないと憂う人が、出来ているとみる人よりもはるかに多い。
通学時に声かけしていても、親たちに返事がないと問題視する人が少なくない。
若衆制度があり、声かけの習慣は身につけているという地域もある。
親子間でまず考えるべきで、自治会の取組むことではないとする人もある。

参考事例

1 豊かで温かい人間関係づくりにつながるあいさつ運動の取組

「あいさつ」は、人間関係を結ぶ始めの一步です。人への親しみや尊敬の気持ちを表すとともに、自分の心を開き、相手を思いやることにつながります。

あいさつは、今の社会に求められる“豊かで温かい人間関係づくり”にとって、とても大切なものであると考えています。

(1) 幼児の発達に沿った幼稚園でのあいさつ運動の取組

幼児は、生活の中で、様々な人々とかかわり、様々な体験を重ね、いろいろなことを学び身に付けていきます。幼児期においては、幼稚園での生活と、家庭などでの生活の連続性を踏まえて教育の充実を図ることが重要であり、幼稚園は、家庭と連携して教育を行うことを前提としています。

そこで、幼児が生活や活動の中で体験していることへの理解を深めながら、その体験が広がっていくことや深まっていくことを大切に、様々な人々との温かな人間関係づくりにつながる事例を紹介します。

【事例1】 ~自分から言いたくなかった「おはよう」~

入園間もない3歳児のAが、保護者とともに登園して来たが、教師の「おはよう」の声かけに、無言で保護者の後ろに隠れる。教師は、A児が前日、電車遊びをしていた姿から、「カンカン、電車が通りますよ。はいどうぞ、電車が行きましたよ」と、横断旗を遮断機に見立て、本児と保護者を門の中に招き入れると、A児は楽しそうに入れた。

次の日から、このやりとりを登園時に繰り返すうち、笑顔で登園できるようになり、数日後、自分から「おはよう！」と元気に挨拶して登園するように変容し、保護者の心配顔も消えた。

幼児があいさつできることとは、相手と心がつながること、つまり、安心できることが前提で、いつもする当たり前のこととなって、習慣化することができます。そのために、毎日繰り返すことで身に付く場面づくりや、あいさつの必要感がある顔見知りの関係づくりが重要で、他律的な「あいさつ」から自律的な「あいさつ」へと促すこととなります。保護者には、「しっかりさせなければ」の焦りから、人への安心感や親しみをもつ段階への理解や、具体的方法を知り、園への信頼関係を築く入園当初の貴重な体験でもありました。

一方では、クラス全体で声を揃えてのあいさつの場面により、いろいろな経験を積み重ねていくことで、必要な言葉や、場面・状況に応じたあいさつが身についていくと考えます。“身につく”ためには、根気強く繰り返し指導することも、大人が率先して“してみせる”ことも、ともに大切にしたいことです。

また、あいさつする気持ちよさに気づくことで、「もっとしよう」「いろいろな人にあいさつしよう」という思いにつながると考え、出会いを広げる場面づくりとして様々な人との出会いの経験も大切にしています。地域の長寿会とのふれあい交流は、世代間の様々な違いを越えて経験が広がる貴重な機会と考え、いろいろな出会い方を工夫しています。

【事例2】 ～カロム盤上のバトル～

カロムのルールをめくり、高齢者と園児の遊び方の違いについて、両者がやり取りをしていたが、どちらも主張を譲らず、遊びが停滞している場面があった。

園児なりの年齢に応じた変則ルールで遊び続ける子どもたちの様子に、昔ながらの本来のルールを主張する高齢者とのやりとりは、譲ってくれない大人の存在に出会った貴重な体験となった。



「高齢者とカロムを楽しむ」

この後、一緒にお弁当を食べたり、話をしたりして親しみを持ち、互いを下の名前で呼び合うなど、帰り際に、高齢者は「楽しく過ごせてよかった。また、来年も来たい。」との言葉を残し帰って行かれた。園児も、「さ～ん、また来て～！」などと、親しみを込めて何回も手を振り続けて別れを惜しんでいた。

地域の長寿会とのふれあいは、子どもの主張に妥協しがちな祖父母の対応とは違い、両者にとって意味ある体験になりました。幼児には“折り合いをつける”“相手と意思を伝え合う”貴重な体験であったとともに、意思を伝えるために試行錯誤する園児の姿には、遥かに世代の離れた長寿会の高齢者への敬意が生まれ、その後のふれあいに生かされました。

このような場を意識して取り入れることによって、様々な人へのかかわり方や思いが育つことを、園のたよりや登降園時の機会に、家庭にも十分啓発し、保護者の理解を促すようにしています。日々、保護者と対面する機会が多い幼稚園は、孤立化・個別化・多様化の時代に流されることなく、保護者の意識啓発に一層努めたいと考えます。

(2) 彦根市内各種地域団体あがりのあいさつ運動の取組

彦根市では、約15に及ぶ各種地域団体が、各小・中学校の前や通学路で、登下校でのあいさつ運動や見守り活動に取り組んでいます。子どもたちや地域の方に活動が分かるよう、特定のジャンパーや腕章、タスキ等をつけて活動に取り組んでいます。

あいさつ運動を継続していくにつれて、子どもたちの顔や名前が自然とわかり、名前を呼んであいさつする子どもたちや、自分からあいさつしてくれる中学生も増えてきました。

さらに、子どもが犯罪に巻き込まれることのないように、あいさつ運動と共に、子どもたちの安全を見守る「見守り活動」にも取り組んでいます。

(3) 高校での茶道部の指導から学んだこと - 継続は力なり -

昨年以來、市内のとある高校で茶道部の指導をしています。

引き受けた時、「礼に始まり礼に終わる」ことを徹底しようと、繰り返し指導を続けてきました。

新入生達は、入部当時正座もまともにできないくらいでしたが、毎回毎回正座し「よろしくお願いします。」「ありがとうございました。」と畳に手をつけ、真の礼を率先して実践しているうちに、いつの間にか生徒たちも自然にできるようになってきました。

今年度の新入生も、先輩に見習って早く習得しているようです。やはり、何事も口だけではなく、実際に大人なり目上の人たちが率先して実践し、根気強く継続していかないと、子どもたちには本当に浸透していかないのではないかと思います。

今では、茶道部だけでなく、廊下で練習している軽音楽部の生徒たちも男女を問わず、顔をあわすと気持ちのいい挨拶をしてくれます。本当に爽やかで気持ちのよいものです。一ヶ所が良くなると周りもよくなっていく（影響しあう）という典型的な取組だと思えます。

2 共感の力、思いやりの力を家庭・地域に根付かせる取組事例

子どもたちに共感の力、思いやりの心、信頼関係（豊かな人間関係）を粘り強く根付かせていくには、家庭と地域が縦ぐるみとなって心を耕し、心を育てる取組を地道にすすめていくことが大切であると考えています。市内の様々な取組の中で、自治会や団体の中に優れた事例が多くあります。

（1）太鼓踊り（郷土民俗芸能）について

<取組の目的>

地域の民俗芸能太鼓踊りを継承するなかで、親と子など世代間相互の連携、交流および協力を促進します。踊り子のお祖父さんやお祖母さんが心配して孫の姿を見に来るなど、世代間の交流がはかられ、町の郷土意識の醸成ならびに一体感“絆”の確認に大きな役割を果たしています。

<小野町太鼓踊りの歴史>

小野町太鼓踊りが何時の頃から当地で始まったものかは不詳ですが、文政6年（1823年）の銘がある締太鼓の胴部が伝わっており、幕末には当地で踊られていたことは明らかです。いわゆる風流踊りを起源に持つ雨乞いの踊りですが、早魃（カンバツ—ひでり）後の豊作の年、あるいは集落にとって特別の事があった年など、20数年に一度程度の間隔で、かなり不定期に踊られてきました。踊りは、踊りの場への移動の「道行き」、そして「場ならし」、さらに三つの踊り「豊年踊り」、「綾踊り」、「こきりこ踊り」からなります。

昭和11年（1936年）に踊られてからは戦後しばらく途絶えていましたが、昭和30年代に青年団が主体となって復活し、地元で伝わる太鼓踊りを保存・伝承することを目的に小野町太鼓踊り保存会が昭和49年に結成されました。小野町太鼓踊りは平成5年2月3日には彦根市指定無形民俗文化財に指定されています。

<取組の内容および成果>

夏まつり定期発表会

8月初旬から練習が開始されますが、指導員による指導のもと、その年々の集落役員や婦人会あるいは子供会が世話役となり、毎年8月15日に、小学4年生から中学2年生までの児童・生徒による太鼓踊り発表会が集落の夏祭りを兼ねて行われています。挨拶や礼儀の徹底など、基礎的な生活習慣の習得にも貢献しているものと自負しています。また、集団活動に馴染みにくい児童・生徒には、少人数での稽古の機会を設けるなどの配慮も行い、小野町に生まれ育ったことを縁として、とにかく全員が太鼓踊りを経験できるように努めています。

76年ぶりの奉納太鼓踊り

昭和11年の踊り方の記録が確認され、その後、それをもとにして本来の形での太鼓踊りを復元した

いという声が集落の住民からあがるようになりました。改めて、町内に残る写真等諸記録が発掘され、古老などからの聞き取りを行うなど、小野町の太鼓踊りの歴史が徐々に明らかになってきました。平成 19 年から本格的に古型太鼓踊りの復元事業にも取り組み始めました。

平成 18 年には拝殿の屋根瓦の葺き替え等の改修が実施され、平成 22 年には神社本殿の檜皮葺き替え工事が実施されました。今春には社務所の改築ならびに拝殿の雨落ち工事等が実施されます。これらによって八幡神社の改修がほぼ完了しますので、9 月の八幡神社秋例祭にはその落慶を兼ねて、76 年ぶりの古型太鼓踊りの奉納も計画されています。

{ 参加した児童の感想 }

- ・ 踊りを覚えるのが大変で、よく間違えてしまいます。太鼓は思ったより重くて肩が痛くなるけど、練習は楽しいです。

(4 年女児)

- ・ はじめはうまく踊れませんでした。でも、大人の方の指導はとても分かりやすく、どんどんうまく踊れるようになりました。

これからも続けていきたいです。(5 年男児)



「指導員から教えられる子ども達」

< 活動継続における課題 >

本集落も高齢化・少子化が進行し、児童・生徒の減少により保存伝承がかなり困難になってきています。保存会の規約を見直すとともに指導者の体制整備をはかる必要があります。今後は、地域において聞き取り調査や復元作業を行いながら、太鼓踊りを通じて高齢者の地域活動への再デビューを促したいと考えています。

将来の小野町のために、今後の奉納太鼓踊りなどの機会を利用して、技術や道具などを含めた詳細な記録を残すことにより、地域・集落をあげて郷土文化を次の世代に繋ぐ取組を継続させていきたいと願っています。

(2) 地域子ども教室や地区子どもチャレンジクラブの取組

< 取組の目的 >

「地域の子どもは、地域で見守り、育てる」ことを目指して、子どもと地域ボランティアが双方向で顔を覚える、気持ちを繋ぐことを目的に実施しています。

教室では「礼儀・作法」を重んじ、始まりと終わりの挨拶の徹底や、道具の使い方、目上の人への接し方、また「待つこと」「譲ること」の体験を行っています。このように、基本的な社会活動の一步となる取組を行うことにより、小さな社会を皆が気持ちよく生きることが教える場となるよう、関わるスタッフが意識を共有しています。

< 取組の内容 >

小学 1・2 年生を対象に二つの小学校および地区公民館を会場に、年間 10 回の教室を開催しています。小学 3 年生以上の子どもを対象にした「子どもチャレンジクラブ」では、子ども教室の内容をワンランク上げた高度な内容で子ども達に「チャレンジしてみる気持ち」と「出来たときの達成感」を体験させることで、自信に繋げる取組をしています。



「ボランティアの手に学ぶ子ども達」

< 取組の成果と課題 >

「地域の先生」であるボランティアスタッフが、子ども達に体験する場を準備して「物作りの楽しさ」「物を大切に作る気持ち」「友達や大人のスタッフとの関わり方」を学びます。

10回の教室は、それぞれのスタッフが特技を活かした内容で、毎回リーダーとなって指導に当たっています。リーダー自身も、子どもに理解できる言葉で説明することを学びながら、共に製作に関わることで、深く子ども達と接することになり、教室やクラブ以外

で顔を合わせても、気軽に言葉が交し合えるようになっています。

参加した児童は、家庭では味わえない体験が出来る喜びを感じ、「順番を守る」「道具は互いに譲り合って使う」など、社会生活に不可欠な人間関係を体得します。また、何よりの収穫は子どもの瞳の煌きと同様に、関わる大人もキラキラ輝いていることで、リーダー会では「地域の子供から元気をもらっています」という声がさらに活動を充実させています。

上記の事業を今後も充実・推進していくには、新しい感覚やアイデアをもった地域の人材を集めて、組織の拡大を図ることと併せて、子どものニーズに合った活動になるよう積極的に取り組んでいきたいと考えています。

(3) P T A「お父さんの研修会」について

< 取組の目的 >

本研修会は、各家庭において父親の存在感が薄くなり善悪のしつけが疎かになってきていることや、父親と母親の役割（義愛と慈愛）を知り、子育ての秘訣を考える機会として開催し、平成23年度で13回目となりました。最近では、入学式や卒業式、運動会など学校行事に参加される父親の姿は、多く見られるようになってきましたが、主体的にP T A活動や研修会へ参加される父親の姿は、依然少ない現状にあります。

地域で、子ども達を守り育てる環境は整いつつありますが、子ども達の教育の原点が「家庭」であることは、いつの時代も不変であります。そのことを、親自身が正しく理解し、努力し、挑戦し続けられるよう、彦根市P T Aでは本研修会を親の「気づきの場・学びの場」として、引き続き開催していく予定です。

< 取組の内容 >

第1回の研修会は、平成11年度に「子育てと父親 今、父親を考える」と題して開催し、京都教育大学教授の小寺正一先生よりご講演を拝聴しました。参加者は、父親会員を中心に約100名あり、平成23年度までに研修会に参加いただいた会員は、延べ約3,200名に上ります。

なお、平成14年度の研修会から犬上郡3町と愛荘町の会員にも参加いただき、湖東ブロックの事業として定着しています。滋賀県P T Aからの補助を受け、限られた予算の中で事業をすすめています。

< 取組の成果と課題 >

研修会の開催で、即座に効果を求めることは難しいと考えております。しかし、参加され

た父親のアンケートでは、「子どもとの向き合い方や、関わり方を学ぶ機会となった。」
「改めて父親の役割を自覚した。」などの建設的な声が多く、大変意義のある研修会となっています。

今後の課題としては、より多くの父親会員に参加をしてもらうことを工夫していくことが大切だと考えています。現在は、会場キャパの関係から単位PTAの会員数×3%程度の参加を呼び掛けています。また、日頃からPTA活動にあまり関心がなく、参加機会の少ない父親の参加を求めていくことが必要であり、いかにして慫慂（ショウヨウ--かたわらから誘い広めること）を図っていくのが今後の課題です。

3 豊かな自然体験、社会体験、生活体験の場を作る取組事例

地域に住む子どもたちに地域とのふれあいの中で、生命を尊重し故郷を愛し、文化や自然環境を大切にすることを育てたいと願っています。そこで、地域の長年月の暮らしや文化の中にある豊かな体験活動に浸らすことは、子ども達の人間力の育成につながると考えています。

(1) ホタルを守る会の取組

< 取組の内容 >

高宮町には、『高宮の自然環境とホタルを守る会』があります。飼育者2人を含めて20人程の会員で、高宮小学校と連携しながら行っています。当会は、居住者の快適さと便利さ等を求めた活動（6月の一斉川掃除）の際、小さな子どもから

「草もホタルも一緒に捨てて、来年ホタル出るんか。」

という素朴な質問から始まった活動です。減少した地元のホタルを親ポタルとして飼育、産卵、放流し、復活、定着させる活動を通じて、人にとっても生物にとってもより良い環境、つまり「蛍は自然環境のパロメーター、蛍が棲める環境」を合言葉に、平成7年より活動をしています。

当会では、この活動が子どもたちに社会性を身につけ地域に貢献できる社会人の育成の一つの取組になればと願い、さらに、ホタルの棲息を通じて、環境意識の高揚を図り各種団体等が参画した住民活動になればと願って活動を続けています。

3~5月：太田川・新之木川・用水路等での幼虫上陸数の調査

5~7月：太田川・新之木川・用水路等でのホタルの実態調査

6月：ホタルの観察と学習発表会の開催（5年生対象）

7月：ホタル学習会の開催（民生児童委員との共催）

河川の清掃活動

7~9月：カワニナ（ホタルの餌）の採取活動

2月：小学校児童との幼虫放流



「守る会の方の説明を聞く子ども」

< 取組の成果と課題 >

5年生児童は、ホタルの種類や棲みやすい環境等、様々なことを学習しながら、生命の尊重・故郷高宮の文化や自然への愛好・環境改善への心づくりを学んでくれたのではないかと考えます。また、指導者も参加した子ども達が今後の地域づくりの主人公になることを願って取り組んでいます。

さらに、6月の「ホタルの観察と学習発表会」では、保護者や家族につき添われての夜の活動であるため、ホタルの話題をとおして和やかな家庭づくりに生かしてもらっていると自負するところです。

本事業は住民の協力が必要なことから、自治会員の絆づくりのきっかけにもなっているものと考えます。

「たかが蛍、されど蛍」です。年間通して大変な作業もありますが、健康な限り今後も活動していきたいと考えています。



「太田川を見つめる子ども達」

(2) カロム普及推進の取組

< 取組の内容 >

カロムは、指で弾くビリヤードのようなボードゲームです。ルールは非常にシンプルで、小学校低学年の子供たちでも十分理解し楽しむことができます。しかし、上達すればするほど戦略や戦術、相手との駆け引き等を考えなければならず、奥の深いゲームでもあります。また、カロムは子ども同士で楽しむだけの遊び道具ではなく、子どもと大人、あるいは、子どもとおじいちゃん・おばあちゃんが一つの盤で遊べることもこのゲームの魅力です。

カロムを体験させる意義

- 1 指先を使い、脳を刺激する
- 2 集中力・精神力の養成する
- 3 直観力・想像力の養成する
- 4 パートナーへの配慮を育む
- 5 フェアプレー精神と自主性を学ぶ
- 6 ルールの変更やハンディキャップ
- 7 郷土愛が育成される
- 8 コミュニケーションの増進が図れる



「自治会が開催されたカロム大会」

取組実践（2010年度実績）

平成 22 年 10 月 17 日 第 2 3 回カロム日本選手権大会（滋賀大学）

年間 9 回 市内小中学校のカロムサポート事業

年間 6 回 市内外の自治会、公民館、児童館のカロムサポート事業
その他、イベント時にカロム体験ブースの設置。

普及活動は、日本カロム協会（事務局は彦根青年会議所内）が主体となっています。

<取組の成果と課題>

子どもが子どもらしく笑いながら遊び、その中から自主性や協調性を学ぶことが、子どもの育ちのうえで重要であり、この点から本事業は何らかの意義あるものと考え実施しています。

時には、ゲームに負けて悔し涙を流す子もいますが、そういう子は次の機会では数段上達していて、明るい笑顔を見せてくれます。こうしたところからも、参加した子どもたちの成長を目の当たりし、喜ばしい限りです。

子ども達の多くの笑顔、成長を見るために、社会教育団体として、地域の子供達にできることは何か、保護者を巻き込む方策も考えながら、今後もより一層活動を発展させていきたいと考えています。



「小学校のカロムサポート事業」

お わ り に

家庭の教育力や地域の教育力を問題にしようとする時、無縁社会とか家庭・地域社会の崩壊などとあっては、どこから手をつけるのかと迷ってしまう。

少なくとも教育や文化を大切に思う風土が前提とならなければならない。教育や文化を大切にする風土づくりこそ、まちづくりの中核になっていなければならない。

ここに掲げた三つのテーマは、決して特定の人や特定の団体だけの問題ではなく、教育や文化を大切にしようとするまちづくりに外ならない。

いささかでも、日頃苦勞いたたいている市民の方々の参考に供することができたら本望である。